

小学生と指導者の剣道観に関する一考察

境 英 俊¹⁾

山 神 眞 一²⁾ 藤 原 章 司²⁾

石 川 雄 一²⁾ 長 野 智 香³⁾

Views of school children and kendo instructors on kendo

Hidetoshi SAKAI¹⁾,

Shinichi YAMAGAMI²⁾, Syouji FUJIWARA²⁾, Yuuichi ISHIKAWA²⁾, Chika NAGANO³⁾

Abstract

We studied the differences between the views of school children and instructors on kendo, considering the length of the children's experience and the instructors' Dan-i, or rank. Our aim was to determine how to popularize kendo among children and to enhance their desire to practice. We compared the children's views with those of instructors and drew the following conclusions:

The conclusion of this study may be summarized as follows.

1. The school children had a strong desire to win matches and improve their skills. They were positive for "Other school events than kendo practice", "Positive effect of kendo practice", "Characteristics of kendo skill", "Popularization of kendo", and "Teaching method of instructors". But they were negative for "Traditional behavior and manner", "Positive feeling for instructors", and "Effect of kendo practice on school performance".
2. Instructors had a strong desire to focus on spirit and made much of the good points of teaching kendo. They were positive for "Matches are necessary for the popularization of kendo", "Kendo is more educational than other sports", and "Popularization of kendo in foreign countries".
3. Students who had less experience of kendo practice were more positive and felt more satisfaction than those who had much experience. The former group had a strong desire to practice match style in order to participate in matches, and had a positive impression of their instructors.

1) 島根大学
〒690-8504
松江市西川津町1060 島根大学教育学部
TEL/FAX : 0852-32-6341
E-mail:sakaihi@edu.shimane-u.ac.jp

1) Faculty of Education Shimane University

2) 香川大学

2) Faculty of Education Kagawa University

3) 寝屋川養護学校

3) Neyagawa School for handicapped children

4. Kendo instructors who had a higher rank were more positive toward teaching kendo than those with a lower rank. The latter had the strongest desire to put great priority on spirit. The former had the strongest desire to find the good points of teaching kendo. They also had a stronger desire to give priority to teaching “Nippon Kendo Kata”, to consider the relation between the number of kendo practitioners and kendo lessons, to conduct events other than kendo practice, and to focus on victory. Instructors with a lower rank saw no distinctive difference between teaching adult beginners and teaching children.
5. Children were more negative than instructors for “Traditional courtesy and manner in kendo”, “Effect on school performance”, and “Affection and longing for instructors”. They were more positive for “School events other than kendo practice” and “Enthusiasm for making kendo an Olympic sport”.

There are two big goals for popularizing kendo among school children: to enhance their desire to keep up kendo practice, and to gain more beginners.

To enhance their desire to keep up their practice, instructors have to be creative and to motivate the children. They also have to recognize their own experience and spirit for kendo, and improve their quality as instructors. To achieve these goals, instructors have to make the effort to gain a higher Dan-i and improve their coaching skills. Moreover, they have to value the relationship of shi-tei-dogyo, aiming at being good instructors who deserve their students' respect.

To gain more beginners, we should focus on public relations. In addition, children who practice kendo and their families should invite other children along. The most important issue for us is to enhance children's desire to keep up their kendo practice.

Key words : views on kendo, school children, kendo instructor

キーワード : 剣道観, 小学生, 剣道指導者

I. はじめに

近年、青少年の剣道人口の減少は著しく、子どもたちの剣道離れは急速に進行している。その実態に関しては、大塚¹⁾、脇本²⁾、岡村¹⁰⁾、浅見ら²⁾によって報告され、その対策への必要性が叫ばれてきた。浅見ら¹⁾は剣道人口減少の要因解明のため、高校生・大学生を対象とした青年の剣道観についての全国的調査を実施し、高齢の剣道愛好者の剣道観との比較も行っている。また、木原ら⁶⁾は、高校生・大学生のこれまでの退部実態と剣道実践に伴う阻害要因について考察している。その中で退部した経験者の剣道経験年数としては、1

～3年未満が最も多く、まったくの初心者というよりは、ある程度進んだ段階、面をつけての基本練習及びかかり稽古・地稽古が始まる前後で多くの者がやめる要因があると指摘した。換言すれば、このことは剣道実践に伴う阻害要因と剣道経験年数との関連性を示唆したものとして意義深いと言えよう。

一方、小学生に関しては、全日本剣道連盟科学委員会研究調査部²²⁾が小学生・中学生の剣道観を全国規模で調査し、小学生の剣道を続けている理由については、『もっと強く・うまくなりたいから』が約6割を超えて最も多く、次いで『試合に出た

い・勝ちたいから』となっており、技能向上による勝利重視が伺える。岡嶋ら⁹⁾は道場に通う小学生の剣道に対する意識を分析し、剣道の試合実績と練習頻度による意識の違いを明らかにし、剣道離れに関連する考察としては、試合で勝つ体験やさらに上の技能を獲得することは継続意欲に影響を与えるが、それらの欲求達成が困難と考えたときに剣道離れに繋がる恐れがあると述べている。そして、ここでも剣道経験年数による意識の違いの関与が指摘されている。さらに、岡嶋ら⁹⁾は指導者のあり方にも言及し、指導者は子どもたちが持っている剣道に対する価値観を認めるとともに、子どもたちが剣道を自主的に継続していくためにはどのような手立てが効果的であるかを詳細に論議する必要性を述べている。その他、剣道指導者を対象にした実態及び意識の調査に関しては、高校の授業指導者及び剣道部指導者を対象とした田中¹⁸⁾¹⁹⁾、武田ら¹⁶⁾¹⁷⁾、松村ら⁸⁾、飯塚ら⁵⁾の報告や学校指導者と道場指導者の剣道に関する意識を比較検討した浅見ら³⁾等がみられる。そのような中で、浅見ら³⁾は特に指導者の段位の違いについて、低段位の指導者の価値観には指導の場面に不安を感じさせる要因があるとし、段位の差違が指導者の剣道に対する価値観に大きく関係していることを示唆している。

このように小学生や指導者を対象とした剣道に対する意識や価値観の研究は、これまでにいくつかなされているが、いずれもそれぞれの対象者別に行ったものであり、両者を同時期に比較分析したものはみられない。また、これらの調査研究以降約10年が経過しており、現在の小学生剣道学習者や剣道指導者においては、その意識や剣道観にも変化があるものと思われる。

そこで、本研究は小学生に対する剣道普及のあり方や剣道継続意欲を向上させる手だてを追及することを目的に、香川県において剣道を行っている小学生とその指導者を対象として、小学生の剣道に対する意識調査及び指導者の剣道や剣道指導に対する意識調査を行った。

II 研究方法

1. 調査項目：小学生に対しては、1996年に全日本剣道連盟科学委員会研究調査部が実施した「小・中学生の剣道観」²²⁾の剣道に対する意識を問う54項目、並びに小学生の属性・実態把握を中心としたフェイスシート13項目(①学年、②性別、③剣道経験年数、④級位、⑤稽古場所、⑥週間稽古日数、⑦1回稽古時間、⑧剣道以外の習い事の有無、⑨家族の剣道経験の有無、⑩勝利と昇級の比較、⑪競技水準、⑫剣道開始理由、⑬剣道継続理由)について調査した。また、指導者に対しては、1998年の浅見ら⁴⁾による「武道(剣道)の普及・継続に関わる要因の調査研究—少年剣道を支援する大人の意識について—」における63項目からなる調査項目と指導者の属性を尋ねるフェイスシート8項目(①年齢・性別、②剣道開始年齢、③剣道経験年数、④段位、⑤指導対象、⑥週間指導日数、⑦1日指導時間、⑧剣道の価値・魅力・意義)について調査した。なお、図1及び図2、表1及び表2に小学生と指導者に対する意識調査の項目を記載した。

2. 調査の実施：2005年9月中旬、香川県内で開催された香川県剣道連盟主催の青少年剣道研修会に参加した小学校5・6年生169名(5年生86名、6年生83名・男子117名、女子52名)及びその小学生の剣道指導者62名(男性55名、女性7名：平均年齢47.5歳)を対象に調査を実施した。

3. 解析方法：小学生、指導者ともに剣道に対する意識を問う項目については、「5. 大いにそう思う、4. 少しそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. 全くそう思わない」の5段階の回答に5～1点を与え、項目毎の平均点を算出した。また、小学生の剣道経験年数による意識の違いを見るために、剣道の経験レベルを剣道開始1～4年目の78名を「短期経験者」とし、5～7年目の91名を「長期経験者」とした。指導者に関しては段位による意識の違いを検討するために、剣道の段位が無段～4段の指導者29名を「低段位者」とし、5段～7段の指導者33名を「高段位者」とした。さらに、本研究において、小学生と指導者それぞれに調査した項目で両者に類似した

内容は16項目であった。本研究では、小学生の調査項目の観点を中心に指導者の意識との比較をすることとした。その際、全日本剣道連盟科学委員会研究調査部が行った「小・中学生の剣道観」²²⁾における11の視点のうち、「剣道によって得られた効果に関する意識」、「剣道を継続することに関する意識」、「剣道の技術向上への意欲に関する意識」、「剣道でいやだと思うことについて」、「剣道以外への関心についての意識」、「剣道に対する将来像」、「剣道の技能特性に関する意識」、「剣道への要望に関する意識」及び「剣道の普及に関する意識」の9の視点について比較分析を行った。なお、両者の意識の比較に関しては、「すごくそう思う」「少しそう思う」の肯定的意見を合わせた%表示で考察した。統計的な処理としては、T検定を用

いた。

Ⅲ 結果と考察

1. 小学生の属性について

表1は小学生の属性を表したものである。剣道経験年数は5年以上が53.8%を占め、小学校低学年(1~2年)で始めた者が多いことがうかがえる。級は三級以下が86.4%を占めており、経験年数の割合に比べ、級位があまり高くない傾向が見られた。1週間の練習日数は3日が50.9%であり、1回の練習時間は1時間半~2時間が全体の90.6%となっていた。「小・中学生の剣道観」²²⁾では、1時間半~2時間が72.5%であり、練習時間がやや延びたことがうかがえる。「試合で勝つこと」と「上の級に合格すること」のどちらがうれしいか

表1 小学生の属性

学年	人数	%	性別	人数	%
5年生	86	50.9	男子	117	69.2
6年生	83	49.1	女子	52	30.8
剣道経験年数	人数	%	週間練習日数	人数	%
1年	9	5.3	1日	1	0.6
2年	22	13.0	2日	37	21.9
3年	26	15.4	3日	86	50.9
4年	21	12.4	4日	36	21.3
5年	36	21.3	5日	3	1.8
6年	45	26.6	6日	4	2.4
7年	10	5.9	7日	2	1.2
級位	人数	%	1回練習時間	人数	%
1級	1	0.6	30分以内	2	1.2
2級	15	8.9	1時間	8	4.7
3級	48	28.4	1時間30分	88	52.1
4級	54	32.0	2時間	65	38.5
5級以下	44	26.0	2時間30分	6	3.6
なし	7	4.1	3時間	0	0.0
練習場所	人数	%	勝利と昇級、どちらがうれしいか	人数	%
自分の学校	44	26.0	試合で勝つこと	87	51.5
自分の学校とそれ以外の場所	74	43.8	どちらかといえば試合で勝つこと	49	29.0
自分の学校以外	51	30.2	どちらかといえば合格すること	22	13.0
			合格すること	11	6.5

については、「試合で勝つこと」が80.5%、「上の級に合格すること」が19.5%であり、上の級を取得するよりも試合での勝利を喜ぶ傾向が見られた。

2. 小学生の剣道に対する意識や価値観の現状について

図1は小学生の剣道に対する意識を問う54項目に対する回答の平均得点を示したものである。4.5点以上の高得点の項目は、「もっと試合で勝ちたい(4.66点)」、「もっと上の級や段をとりたい(4.51点)」であり、小学生の剣道技術向上に対する意識が高いことが明らかになった。10年前の「小・中学生の剣道観」²²⁾の結果では、表示形式が%で示されているが、4点と5点を合計した肯定的回答の割合で見ると、1位が「もっと試合で勝ちたい(89.7%)」、2位が「剣道を始めてから、体がじょうぶになった(81.9%)」、そして3位が「もっと上の級や段をとりたい(79.3%)」であった。同じ基準では比較できないものの、10年前には、剣道で得られた効果に関する意識が上位にあったことが分かる。次に4.0点以上の肯定的な得点の項目については、「剣道の仲間と練習(稽古)以外の行事をやりたい(4.41点)」、「剣道を始めてから、友達が増えたと思う(4.36点)」、「剣道では、気力がもっとも大切だ(4.24点)」、「剣道では、体力がもっとも大切だ(4.17点)」、「剣道をやっている人にも、やることをすすめた(4.06点)」、「剣道を始めてから、体がじょうぶになったと思う(4.06点)」、「先生の教え方はわかりやすい(4.05点)」など、剣道以外への関心、剣道によって得られた効果、剣道の技能特性、剣道の良さや指導者に対する意識に関する項目の得点が高い傾向にあった。特に、小学生は剣道で友達が増えたと感じており、剣道を一緒に練習している仲間との遊びやレクリエーションなど剣道以外で交流することを強く望んでいることが理解できる。また、前出の「小・中学生の剣道観」²²⁾と今回高得点(4.0点以上)を示した項目の傾向とを比較すると、ほぼ同様な特徴がみられたが、その中で「剣道を他の人にすすめた(4.06点)」については10年前に肯定的な回答が68.3%

であったのが、今回は58.9%となり、小学生の中で人にすすめるほど剣道の良さを認識している割合が低くなっていた。

これに対して、平均点が3.0点未満の項目は、設問に対して否定的な判断をしていると言える。それは、「剣道の試合でも、声援やたいこなどのにぎやかな応援をしたい(2.90点)」、「打たれたときの痛みがいやだ(2.83点)」、「いつも同じ練習(稽古)をくりかえすのはいやだ(2.82点)」、「冬の練習(稽古)は寒くていやだ(2.78点)」、「私も剣道の先生になりたい(2.74点)」、「正座や黙想が好きだ(2.72点)」、「剣道に時間をとられて、やりたいことができない(2.71点)」、「剣道の試合での「一本」はわかりにくい(2.63点)」、「練習(稽古)の時間が長すぎる(2.46点)」、「剣道の教え(心がまえ)は、むずかしくてわからない(2.43点)」、「男子と女子で、練習(稽古)の中身は違う方がよい(2.41点)」、「1週間の練習(稽古)日が多すぎる(2.38点)」、「剣道を始めてから、学校の勉強の成績が良くなったと思う(2.33点)」、「今、なんとなく剣道に興味がなく、やる気が起きない(2.25点)」及び「剣道の先生は、堅苦しい(2.24点)」の15項目であった。小学生にとっては、剣道の教えや1本の判定はわかりにくいのではと思われたが、5・6年生までに理解しやすい段階的な指導がこれまでなされてきたことや小学生が多くの試合をこなしていること等が今回の結果の要因として推察できる。しかし、正座や黙想といった剣道の伝統的な行動様式に対しては、好意的に感じていないことが明らかとなった。その要因としては、小学生が正座や黙想を行うことの意味を正しく理解していないことや日常生活とのギャップ等が考えられる。このような小学生に対して、伝統文化としての行動様式を分かりやすく伝えなければならない。また、剣道の先生への憧れや学校の成績への剣道効果に対しても、消極的・否定的な意識が強く、小学生があこがれるような剣道の良いイメージを作ることが必要であると思われる。

表2 指導者の属性

年齢	全体平均	SD	人数	性別	全体	男性	女性
全体	45.7	11.5	62	全体	62	55	7
低段位者	38.9	8.1	29	低段位者	29	23	6
高段位者	51.6	10.9	33	高段位者	33	32	1
剣道開始年齢	全体平均	SD	人数	剣道経験年数	全体平均	SD	人数
全体	16.3	12.0	62	全体	20.7	11.3	62
低段位者	17.7	13.5	29	低段位者	13.2	8.1	29
高段位者	15.2	10.6	33	高段位者	27.3	9.4	33

段位	全体	%	低段位者	%	高段位者	%
なし	1	1.6	1	3.4	0	0.0
初段	1	1.6	1	3.4	0	0.0
二段	3	4.8	3	10.4	0	0.0
三段	14	22.6	14	48.3	0	0.0
四段	10	16.1	10	34.5	0	0.0
五段	11	17.8	0	0.0	11	33.3
六段	10	16.1	0	0.0	10	30.3
七段	12	19.4	0	0.0	12	36.4
週間指導日数	全体	%	低段位者	%	高段位者	%
1日	6	9.7	5	17.2	1	3.0
2日	18	29.0	9	31.0	9	27.3
3日	29	46.8	12	41.4	17	51.5
4日	8	12.9	3	10.4	5	15.2
5日	0	0.0	0	0.0	0	0.0
6日	1	1.6	0	0.0	1	3.0
7日	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1回指導時間	全体	%	低段位者	%	高段位者	%
30分	1	1.6	1	3.4	0	0.0
1時間	12	19.4	5	17.2	7	21.2
1時間30分	34	54.8	15	51.8	19	57.6
2時間	14	22.6	8	27.6	6	18.2
2時間30分	1	1.6	0	0.0	1	3.0
3時間	0	0.0	0	0.0	0	0.0

境：小学生と指導者の剣道観に関する一考察

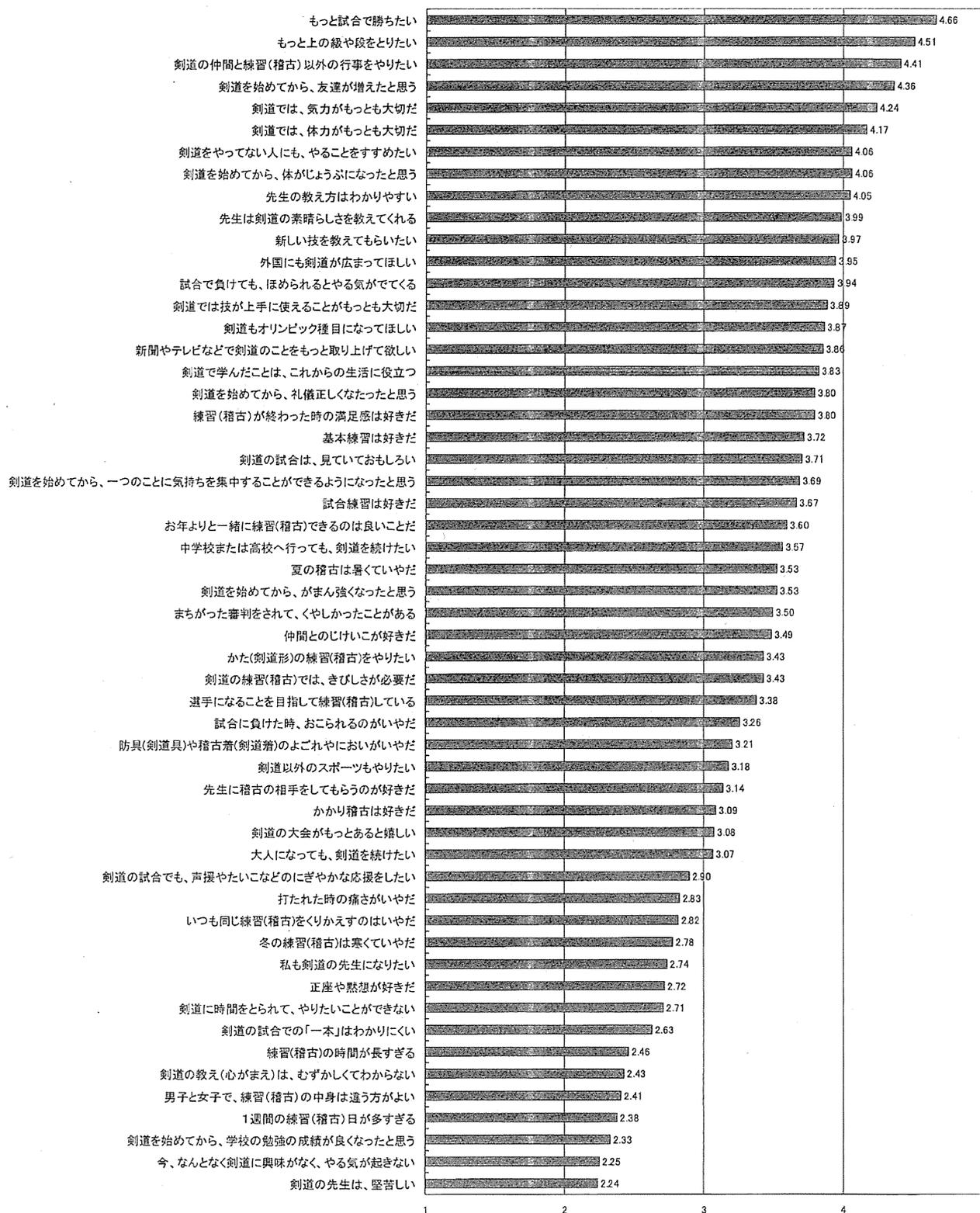


図1 小学生の54項目に対する回答の平均得点

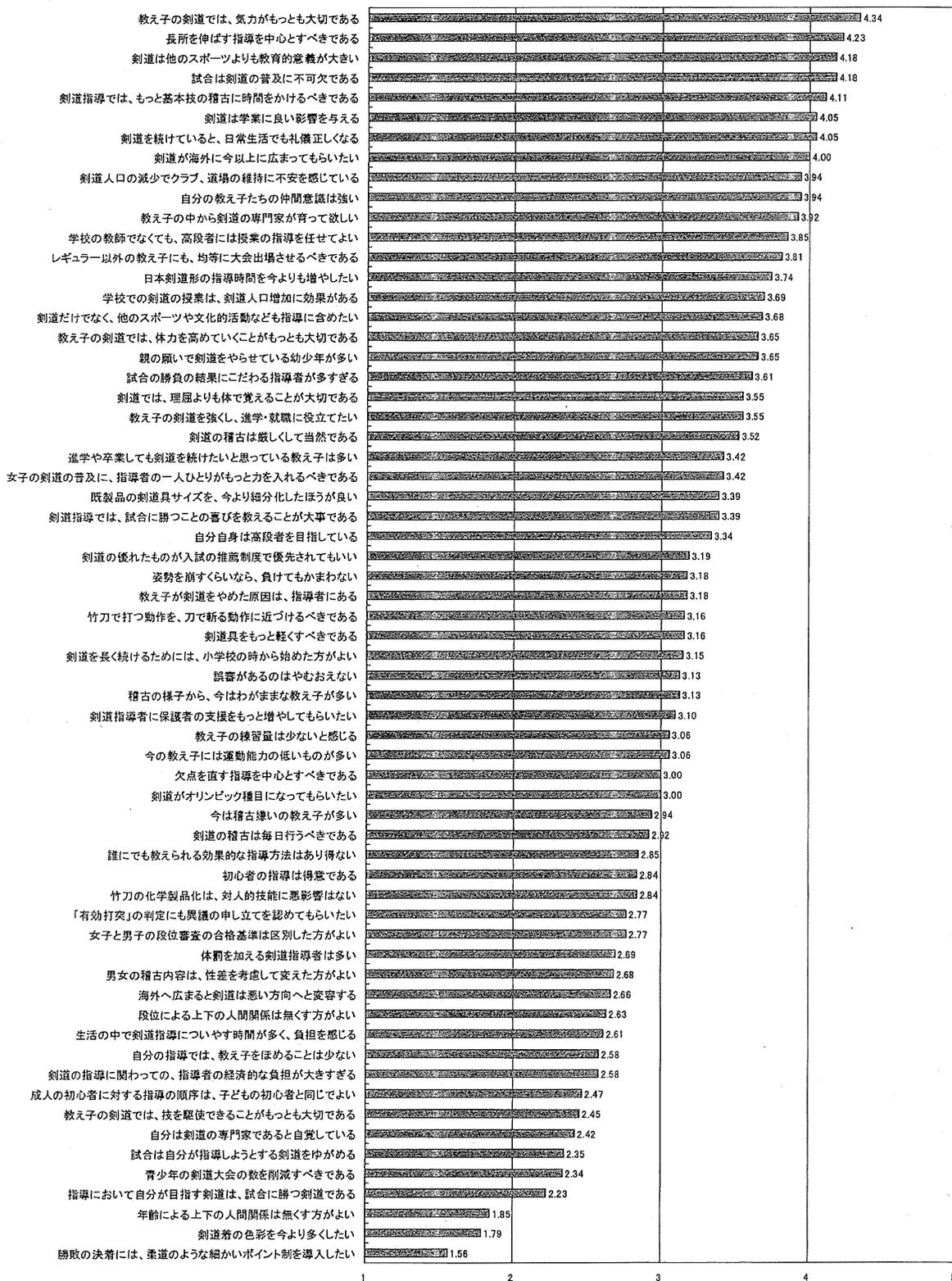


図2 指導者の63項目に対する回答の平均得点

3. 指導者の属性について

表2は指導者の属性を表したものである。剣道開始年齢は高段位者の方が低い傾向が見られ、それともなると、経験年数も高段位者の方が長くなっていた。1週間の指導日数は全体では2日～3日が75.8%を占めており、低段位者と高段位者ともに同様の傾向が見られた。また、1回の指導時間は1時間～2時間がほとんどであり、指導日数同様、段位による違いは見られなかった。

4. 指導者の剣道や剣道指導に対する意識と価値観の現状について

図2は指導者の剣道に対する意識を問う63項目に対する回答の平均得点を示したものである。4.0点以上の肯定的な得点の項目は8項目であり、「教え子の剣道では、気力が最も大切である(4.34点)」と「長所を伸ばす指導を中心とするべきである(4.23点)」は、浅見ら⁴⁾の報告と同様に1位、2位を占めた項目であり、指導者は、10年前も現在も指導面では「気力」を重視し、「長所を伸ばす指導」を行うべきだと思っていることが明らかとなった。3位以降の項目は、「剣道は他のスポーツよりも教育的意義が大きい(4.18点)」、「試合は剣道の普及に不可欠である(4.18点)」、「剣道指導では、もっと基本技の稽古に時間をかけるべきである(4.11点)」、「剣道は学業に良い影響を与える(4.05点)」、「剣道が続いていると、日常生活でも礼儀正しくなる(4.05点)」及び「剣道が海外に今以上に広まってほしい(4.00点)」であった。「試合は剣道の普及に不可欠である(4.18点)」と、「剣道が海外に今以上に広まってほしい(4.00点)」については、浅見ら⁴⁾の報告によると、それぞれ3.98点と3.73点であり、今回調査対象とした指導者は、剣道の普及に対する試合の位置付けが高く、また、剣道の海外普及に対する意識が高い傾向になっていることが明らかとなった。その他の4.0点以上の肯定的項目については、浅見ら⁴⁾の報告と同様な傾向を示していた。

これらの結果より、現在の指導者は気力を重視し、長所を伸ばす指導を心がけつつ、同時に試合による剣道普及の重要性を強く認めていた。試合が及ぼす教育的な意義についてどのように考えて

いるかは明らかにされていないが、試合重視が勝利重視・偏重にならないことが大前提であることは言うまでもない。

5. 小学生における短期経験者と長期経験者の平均得点の比較について

表3は、小学生における短期経験者と長期経験者の平均得点を比較したものである。4.0点以上の肯定的な項目は、短期経験者が10項目、長期経験者が7項目であり、短期経験者の方が剣道に対してより肯定的に捉えている項目が多かった。短期経験者、長期経験者ともに1位が「もっと試合で勝ちたい(短期経験者4.74点、長期経験者4.58点)」、2位が「もっと上の級や段をとりたい(短期経験者4.60点、長期経験者4.44点)」であった。有意な差は認められないものの、短期経験者は長期経験者よりも剣道の技能向上に対する意識が高いことが分かる。また、短期経験者は3位が「剣道の仲間と練習(稽古)以外の行事をやりたい(短期経験者4.46点、長期経験者4.36点)」、4位が「剣道を始めてから、友達が増えたと思う(短期経験者4.32点、長期経験者4.40点)」であったのに対し、長期経験者の順位は逆であったが、剣道仲間という観点からは、類似しており、両者ともに仲間とのコミュニケーションに対する意識の高さを感じられる。

両者の得点で0.24以上の差違があったのは、「剣道をやっていない人にも、やることをすすめたい(短期経験者4.19点、長期経験者3.95点)」、「試合練習は好きだ(短期経験者3.96点、長期経験者3.43点)」($p<0.01$)、「剣道の大会がもっとあると嬉しい(短期経験者3.35点、長期経験者2.85点)」($p<0.05$)及び「剣道の先生は、堅苦しい(短期経験者2.04点、長期経験者2.42点)」($p<0.05$)の4項目であり、「剣道の先生は、堅苦しい」を除き、短期経験者の方が肯定的な得点が高く、両者の間には有意な差が認められた。また、有意な差は認められなかったものの、短期経験者は他の人にも剣道をすすめたいという意識が長期経験者よりも強く表れていた。剣道を始めて間がない子どもに対しては指導者が技能向上を目指せるような指導を心がけるとともに堅苦しい雰囲気あまり出さないように指導していることが推察される。

表3 小学生における短期経験者と長期経験者の比較

項目	対象群		有意差
	短期経験者	長期経験者	
	平均得点±標準偏差		平均得点±標準偏差
もっと試合で勝ちたい	4.74±0.69		4.58±0.84
もっと上の級や段をとりたい	4.60±0.74		4.44±0.83
剣道の仲間と練習(稽古)以外の行事をやりたい	4.46±0.96		4.36±0.96
剣道を始めてから、友達が増えたと思う	4.32±1.06		4.40±1.10
剣道では、気力がもっとも大切だ	4.18±0.88		4.30±0.90
剣道では、体力がもっとも大切だ	4.17±0.90		4.16±1.04
剣道をやってない人にも、やることをすすめたい	4.19±1.00		3.95±1.17
剣道を始めてから、体がじょうぶになったと思う	3.99±1.02		4.12±0.96
先生の教え方はわかりやすい	4.17±0.92		3.96±1.14
先生は剣道の素晴らしさを教えてくれる	4.03±0.90		3.97±1.11
新しい技を覚えてもらいたい	4.08±1.03		3.88±1.21
外国にも剣道が広まってほしい	3.96±1.19		3.93±1.23
試合で負けても、ほめられるとやる気がでてる	3.99±1.27		3.90±1.33
剣道では技が上手に使えることがもっとも大切だ	4.05±1.07		3.75±1.25
剣道もオリンピック種目になってほしい	3.96±1.07		3.79±1.26
新聞やテレビなどで剣道のことをもっと取り上げて欲しい	3.91±1.24		3.82±1.29
剣道で学んだことは、これからの生活に役立つ	3.90±1.10		3.77±1.18
剣道を始めてから、礼儀正しくなったと思う	3.82±1.09		3.78±1.25
練習(稽古)が終わった時の満足感は好きだ	3.88±1.09		3.73±1.31
基本練習は好きだ	3.74±1.01		3.69±1.21
剣道の試合は、見ていておもしろい	3.83±1.12		3.60±1.17
剣道を始めてから、一つのことに気持ちを集中することができるようになったと思う	3.64±1.01		3.73±1.24
試合練習は好きだ	3.96±1.16	**	3.43±1.36
お年よりと一緒に練習(稽古)できるのは良いことだ	3.74±1.23		3.48±1.22
中学校または高校へ行っても、剣道を続けたい	3.56±1.28		3.58±1.50
夏の稽古は暑くていやだ	3.46±1.37		3.59±1.27
剣道を始めてから、がまん強くなったと思う	3.45±1.18		3.60±1.18
まちがった審判をされて、くやしかったことがある	3.29±1.56		3.68±1.40
仲間とのじゃいこが好きだ	3.46±1.19		3.51±1.17
かた(剣道形)の練習(稽古)をやりたい	3.32±1.16		3.52±1.26
剣道の練習(稽古)では、きびしさが必要だ	3.49±1.05		3.37±1.14
選手になることを目指して練習(稽古)している	3.46±1.30		3.31±1.28
試合に負けた時、おこられるのがいやだ	3.17±1.20		3.34±1.36
防具(剣道具)や稽古着(剣道着)のよごれやにおいがいやだ	3.12±1.53		3.29±1.32
剣道以外のスポーツもやりたい	3.38±1.46		3.01±1.54
先生に稽古の相手をしてもらうのが好きだ	3.24±1.31		3.04±1.22
かかり稽古は好きだ	3.06±1.36		3.11±1.28
剣道の大会がもっとあると嬉しい	3.35±1.35	*	2.85±1.24
大人になっても、剣道を続けたい	3.12±1.29		3.02±1.34
剣道の試合でも、声援やたいこなどのにぎやかな応援をしたい	2.87±1.20		2.92±1.50
打たれた時の痛みがいやだ	2.78±1.46		2.87±1.34
いつも同じ練習(稽古)をくりかえすのはいやだ	2.85±1.29		2.79±1.25
冬の練習(稽古)は寒くていやだ	2.59±1.24		2.93±1.42
私も剣道の先生になりたい	2.85±1.29		2.65±1.34
正座や黙想が好きだ	2.67±1.14		2.77±1.35
剣道に時間をとられて、やりたいことができない	2.60±1.28		2.80±1.39
剣道の試合での「一本」はわかりにくい	2.42±1.30		2.80±1.28
練習(稽古)の時間が長すぎる	2.36±1.16		2.54±1.19
剣道の教え(心がまえ)は、むずかしくてわからない	2.36±1.04		2.48±1.17
男子と女子で、練習(稽古)の中身は違う方がよい	2.29±1.24		2.52±1.22
1週間の練習(稽古)日が多すぎる	2.29±1.14		2.46±1.11
剣道を始めてから、学校の勉強の成績が良くなったと思う	2.40±1.26		2.27±1.22
今、なんとなく剣道に興味がなく、やる気が起きない	2.08±1.02		2.40±1.26
剣道の先生は、堅苦しい	2.04±1.05	*	2.42±1.05

** : p<0.01 * : p<0.05

境：小学生と指導者の剣道観に関する一考察

表4 指導者における低段位者と高段位者の比較

項目	対象群		有意差
	低段位者	高段位者	
教え子の剣道では、気力がもっとも大切である	4.32±0.67	4.35±0.60	
長所を伸ばす指導を中心とすべきである	3.96±0.69	4.44±0.56	**
剣道は他のスポーツよりも教育的意義が大きい	4.14±0.89	4.21±0.77	
試合は剣道の普及に不可欠である	3.96±0.92	4.35±0.81	
剣道指導では、もっと基本技の稽古に時間をかけるべきである	4.07±0.77	4.15±0.78	
剣道は学業に良い影響を与える	3.93±0.77	4.15±0.78	
剣道を続けていると、日常生活でも礼儀正しくなる	4.00±0.77	4.09±0.93	
剣道が海外に今以上に広まってもらいたい	3.96±0.88	4.03±1.00	
剣道人口の減少でクラブ、道場の維持に不安を感じている	3.82±0.86	4.03±0.90	
自分の教え子たちの仲間意識は強い	3.89±0.92	3.97±0.97	
教え子の中から剣道の専門家が育って欲しい	3.89±0.92	3.94±1.07	
学校の教師でなくても、高段者には授業の指導を任せてよい	3.71±0.94	3.97±0.90	
レギュラー以外の教え子にも、均等に大会出場させるべきである	3.57±0.84	4.00±0.89	
日本剣道形の指導時間を今よりも増やしたい	3.43±0.79	4.00±0.65	**
学校での剣道の授業は、剣道人口増加に効果がある	3.36±0.99	3.97±0.83	*
剣道だけでなく、他のスポーツや文化的活動なども指導に含めたい	3.39±0.88	3.91±0.93	*
教え子の剣道では、体力を高めていくことがもっとも大切である	3.68±0.82	3.62±0.99	
親の願いで剣道をやらせている幼少年が多い	3.57±0.74	3.71±0.91	
試合の勝負の結果にこだわる指導者が多すぎる	3.32±0.67	3.85±0.86	**
剣道では、理屈よりも体で覚えることが大切である	3.46±0.84	3.62±1.07	
教え子の剣道を強くし、進学・就職に役立てたい	3.68±0.90	3.44±1.16	
剣道の稽古は厳しくして当然である	3.39±0.92	3.62±0.82	
進学や卒業しても剣道を続けたいと思っている教え子が多い	3.18±0.90	3.62±0.95	
女子の剣道の普及に、指導者の一人ひとりをもっと力を入れるべきである	3.29±0.81	3.53±0.83	
既製品の剣道具サイズを、今より細分化したほうが良い	3.43±0.96	3.35±1.15	
剣道指導では、試合に勝つことの喜びを教えることが大事である	3.18±0.94	3.56±0.99	
自分自身は高段者を目指している	2.75±1.08	3.82±0.94	
剣道の優れたものが入試の推薦制度で優先されてもいい	3.07±1.09	3.29±1.24	
姿勢を崩すくらいなら、負けてかまわない	3.80±1.19	3.18±1.22	
教え子が剣道をやめた原因は、指導者にある	3.14±0.59	3.21±0.84	
竹刀で打つ動作を、刀で斬る動作に近づけるべきである	3.14±0.93	3.18±1.03	
剣道具をもっと軽くすべきである	3.18±1.09	3.15±1.08	
剣道を長く続けるためには、小学校の時から始めた方がよい	3.14±1.11	3.15±1.08	
誤審があるのはやむおえない	3.32±1.02	2.97±1.11	
稽古の様子から、今はわがままな教え子が多い	3.25±1.04	3.03±1.17	
剣道指導者に保護者の支援をもっと増やしてもらいたい	3.04±0.96	3.15±0.96	
教え子の練習量は少ないと感じる	2.96±0.92	3.15±1.02	
今の教え子には運動能力の低いものが多い	3.11±1.17	3.03±1.11	
欠点を直す指導を中心とすべきである	3.11±0.96	2.91±1.08	
剣道がオリンピック種目になってもらいたい	3.18±1.42	2.85±1.31	
今は稽古嫌いの教え子が多い	2.96±0.92	2.91±0.90	
剣道の稽古は毎日行うべきである	2.86±0.89	2.97±1.09	
誰にでも教えられる効果的な指導方法はあり得ない	2.75±0.89	2.94±1.15	
初心者の指導は得意である	2.75±0.75	2.91±0.87	
竹刀の化学製品化は、対人的技能に悪影響はない	2.89±0.79	2.79±1.09	
「有効打突」の判定にも異議の申し立てを認めてもらいたい	3.00±1.05	2.59±1.35	
女子と男子の段位審査の合格基準は区別した方がよい	2.68±1.09	2.85±1.05	
体罰を加える剣道指導者は多い	2.75±1.00	2.65±1.07	
男女の稽古内容は、性差を考慮して変えた方がよい	2.43±0.96	2.88±1.12	
海外へ広まると剣道は悪い方向へと変容する	2.57±1.07	2.74±1.16	
段位による上下の人間関係は無くす方がよい	2.46±0.84	2.76±1.18	
生活の中で剣道指導につきやす時間が多く、負担を感じる	2.36±1.03	2.82±1.22	
自分の指導では、教え子をほめることは少ない	2.39±0.69	2.74±1.29	
剣道の指導に関わっての、指導者の経済的な負担が大きすぎる	2.43±1.07	2.71±1.06	
成人の初心者に対する指導の順序は、子どもの初心者と同じでよい	2.75±0.93	2.24±0.89	*
教え子の剣道では、技を駆使できることがもっとも大切である	2.39±0.83	2.50±0.83	
自分は剣道の専門家であると自覚している	2.07±0.81	2.71±1.19	
試合は自分が指導しようとする剣道をゆがめる	2.46±0.69	2.26±0.83	
青少年の剣道大会の数を削減すべきである	2.21±0.69	2.44±1.11	
指導において自分が目指す剣道は、試合に勝つ剣道である	2.11±0.74	2.32±1.04	
年齢による上下の人間関係は無くす方がよい	1.86±0.97	1.85±0.89	
剣道着の色彩を今より多くしたい	1.68±0.67	1.88±1.04	
勝敗の決着には、柔道のような細かいポイント制を導入したい	1.68±0.77	1.47±0.66	

**：p<0.01 *：p<0.05

6. 指導者における低段位者と高段位者の平均得点の比較について

表4は、指導者における低段位者と高段位者の平均得点を比較したものである。4.0点以上の肯定的な項目は、低段位者が4項目、高段位者が11項目であり、高段位者の方が剣道の指導に対してより肯定的に捉えている項目が多かった。「教え子の剣道では、気力が最も大切である(低段位者4.32点、高段位者4.35点)」については、低段位者では1位であったが、高段位者では2位であった。高段位者は「長所を伸ばす指導を中心とすべきである(低段位者3.96点、高段位者4.44点)」(p<0.01)が1位であり、低段位者よりも肯定的な得点が高く、両者の間には有意な差が認められた。高段位者の方が指導の第一義として子どもの長所を伸ばす指導を大切に考えていることが分かる。また、「試合は剣道の普及に不可欠である(低段位者3.96点、高段位者4.35点)」については、低段位者が6位であったのに対して高段位者は2位であり、有意な差は認められなかったものの、高段位者の方が肯定的な得点が高く、剣道の普及に試合が大きく関与することを認識している傾向が伺える。

その他の項目において低段位者と高段位者の得点が有意に異なっていたのは次に示す5項目であった。「日本剣道形の指導時間をもっと増やしたい(低段位者3.43点、高段位者4.00点)」(p<0.01)、「学校での剣道の授業は、剣道人口増加に効果がある(低段位者3.36点、高段位者3.97点)」(p<0.05)、「剣道だけでなく、他のスポーツや文化的活動なども指導に含めたい(低段位者3.39点、高段位者3.91点)」(p<0.05)及び「試合の勝負の結果にこだわる指導者が多すぎる(低段位者3.32点、高段位者3.85点)」(p<0.01)については、いずれも高段位者の方が低段位者よりも肯定的な得点が高く、両者の間には有意な差が認められた。高段位者は、剣道技術の伝統文化性を示す日本剣道形をもっと指導したいという意識が強いと同時に、また一方では剣道以外のスポーツや文化的活動の必要性も認識していることが伺える。さらに、高段位者は剣道人口を増加させるために、学校での剣道授業の充実を望んでいることや試合に関し

ては勝負にこだわりすぎる指導者が多いことをより強く感じていることがわかった。そして、「成人の初心者に対する指導の順序は、子どもの初心者と同じで良い(低段位者2.75点、高段位者2.24点)」(p<0.05)については、高段位者の方が低段位者よりも否定的であり、両者の間には優位な差が認められた。特に高段位者は、大人と子どもの初心者指導は同じではないことを強く認識していることが明らかになった。このように高段位者の指導や普及に対する特徴的な考え方は、杉山¹⁴⁾、山神²¹⁾、角¹³⁾¹⁴⁾が望ましい剣道指導者のあり方や指導法として提示している考え方に類似したものである。

7. 小学生と指導者の剣道観に関する比較分析について

図3は小学生と指導者の意識の比較を表したものである。

1) 剣道によって得られた効果に関する意識

「剣道を始めてから、礼儀正しくなったと思う」、「剣道を続けていると、日常生活でも礼儀正しくなる」という剣道によって得られた効果に関する肯定的回答は、小学生68.6%、指導者75.9%であり、指導者の方がより肯定的であったものの有意な差は認められなかった。また「小・中学生の剣道観」²²⁾では、剣道をして礼儀正しくなったとする肯定的回答は57.3%であり、今回の結果より約11%低かった。いずれにしても剣道で礼儀が正しくなるという効果については、指導者に比べて小学生の意識がやや低いがともに肯定的であった。また、「剣道を始めてから勉強の成績が良くなったと思う」、「剣道は学業に良い影響を与える」についての肯定的回答は、小学生18.3%、指導者79.0%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。指導者は剣道が学業に良い影響を与えているが、小学生はほとんど勉強には影響が無いと感じていることが明らかになった。「小・中学生の剣道観」²²⁾においても、小学生の肯定的回答は22.3%であり、本研究の結果と同様の傾向が見られた。

境：小学生と指導者の剣道観に関する一考察

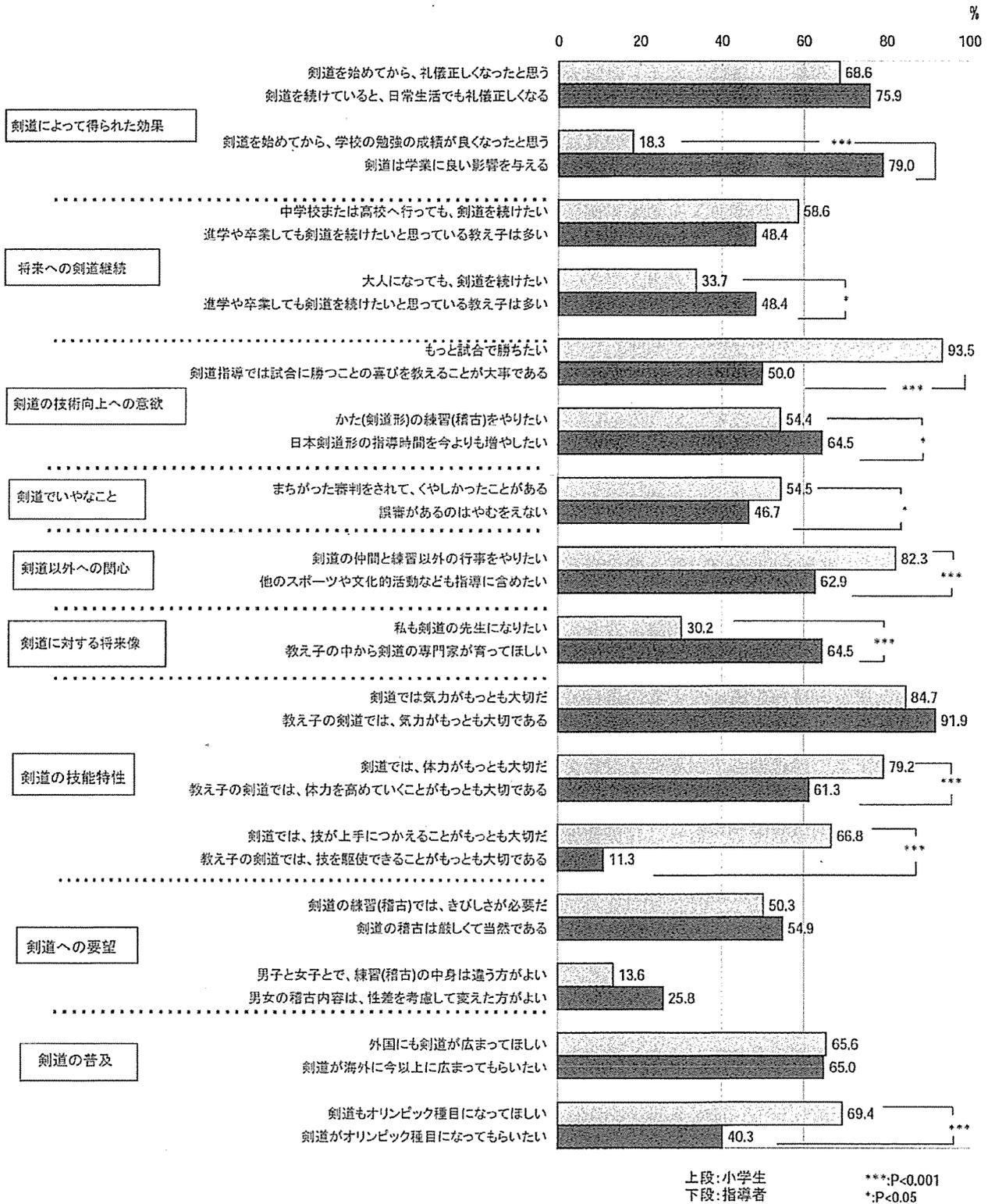


図3 小学生と指導者の意識の比較

2) 剣道を継続することに関する意識

「中学校や高校へ行っても剣道を続けたい」、「進学や卒業しても剣道を続けたいと思っている教え子が多い」という剣道を継続することに関する肯定的回答は、小学生58.6%、指導者48.4%であり、小学生の方がより肯定的であったものの有意な差は認められなかった。一方、「大人になっても剣道を続けたい」、「進学や卒業しても剣道を続けたい」と思っている教え子が多い」についての肯定的回答は、小学生33.7%、指導者48.4%であり、両者の間には5%水準で有意な差が認められた。小学生は中学や高校では剣道を続ける意思があるが、大人になってからのことはわからないといった現時点での正直な気持ちの表れだと思われる。

3) 剣道の技術向上への意欲に関する意識

「もっと試合で勝ちたい」、「試合に勝つ喜びを教えることが大事である」という技術向上への意欲に関する肯定的回答は、小学生93.5%、指導者50.0%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。岡島ら⁹⁾は試合で勝つことは継続意欲に影響を与えるが、達成が困難と考えたときには剣道離れに繋がると指摘しており、小学生の勝ちたいと思う気持ちや勝ったときの喜びに対して、指導者はどう対応し、どのように指導していくのが小学生の技術向上への意欲を考える上で大きな意味を持つことを示唆している。また、「かた(剣道形)の練習をやりたい」、「日本剣道形の指導時間を今よりも増やしたい」についての肯定的回答は、小学生54.4%、指導者64.5%であり、両者の間には5%水準で有意な差が認められたが、両者とも日本剣道形を行う必要性を感じていることが明らかになった。

4) 剣道でいやだと思ふことについて

「まちがった審判をされて、くやしかったことがある」、「誤審があるのはやむをえない」という剣道でいやだと思ふことに関する肯定的回答は、小学生54.5%、指導者46.7%であり、両者の間には5%水準で有意な差が認められた。小学生が誤審でくやしき思いを経験したことに対して、指導者は誤審については否定できないものの認めるべきではないという複雑な心境を読み取ることがで

きる。小学生も高学年になると自分の試合に関して誤審であるかどうかの判断が十分できるということを審判員は認識し、審判しなければならないことを考えさせられる結果でもある。現在、都道府県及び地区レベルで審判講習会が多数開かれており、指導者は積極的に参加し、自己の審判能力を高めるよう研鑽を積むことが必要である。

5) 剣道以外への関心についての意識

「剣道の仲間と練習(稽古)以外の行事(遊び・レクリエーション)をやりたい」、「剣道だけでなく、他のスポーツや文化的活動なども指導に含めたい」という剣道以外への関心に関する肯定的回答は、小学生82.3%、指導者62.9%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。特に小学生は剣道以外の行事に対する要望が非常に強いことが分かった。また、有意な差が認められたものの、指導者も剣道以外の活動も指導に含めたいと考えており、今後は、子どもたちの興味関心を幅広く理解し、剣道仲間とのさらに深いコミュニケーションを図る場として、有効に取り入れていく実践が展開されなければならないと言えよう。

6) 剣道に対する将来像

「私も剣道の先生になりたい」、「教え子の中から剣道の専門家が育って欲しい」という剣道に対する将来像に関する肯定的回答は、小学生30.2%、指導者64.5%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。指導者には、教え子には剣道を継続してもらい、できれば指導者になってほしいという願いがあるものの、現実的には子どもたちにはそのような意識は低いことがわかった。「指導してくれている先生のようにになりたい」と思ってくれるような子どもを一人でも多く育てられる人間的な魅力のある指導者を目指さなければならない。

7) 剣道の技能特性に関する意識

「剣道では気力がもつとも大切だ」、「教え子の剣道では、気力が最も大切である」という剣道の技能特性に関する肯定的回答は、小学生84.7%、指導者91.9%であり、指導者の方がより肯定的であったものの有意な差は認められなかった。一方、「剣道では、体力がもつとも大切だ」、「教え子の

剣道では、体力を高めていくことがもっとも大切である」に関する肯定的回答は、小学生は79.2%、指導者61.3%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。また、「剣道では、技が上手につかえることがもっとも大切だ」、「教え子の剣道では、技を駆使できることがもっとも大切である」に関する肯定的回答は、小学生66.8%、指導者11.3%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。小学生も指導者も差があるものの気力、体力の重要性については認識していたが、技については意識の違いが見られ、特に指導者の方は肯定的な割合が低かった。剣道には精神的特性だけではなく、競技的特性や運動的特性が含まれることを踏まえ、小学生の体力や技の技能特性に関する意識の高さも考慮した指導を心がける必要があると思われる。

8) 剣道への要望に関する意識

「剣道の練習(稽古)では、きびしさが必要だ」、「剣道の稽古は厳しくて当然である」という剣道への要望に関する肯定的回答は、小学生50.3%、指導者54.9%であり、両者の間に有意な差は認められなかった。両者とも稽古の厳しさについての認識は類似しており、厳しくするのが当然とする意識は高くないことが分かった。また、「男子と女子とで、練習(稽古)の中身は違うほうがよい」、「男女の稽古内容は、性差を考慮して変えたほうがよい」に関する肯定的回答は、小学生13.6%、指導者25.8%と肯定的な割合が低く、また両者の間に有意な差は認められなかった。小学生段階では両者ともに男女の稽古内容は一緒に良いとする考えであることが分かった。

9) 剣道の普及に関する意識

「外国にも剣道が広まってほしい」、「剣道が海外に今以上に広まってほしい」という剣道の普及に関する肯定的回答は、小学生が65.6%、指導者が69.4%であり、両者の間に有意な差は認められなかったものの、小学生も指導者も海外に剣道が普及することには前向きであることが分かった。また、「剣道もオリンピック種目になってほしい」、「剣道がオリンピック種目になってほしい」に関する肯定的回答は、小学生が65.0%、指

導者が40.3%であり、両者の間には0.1%水準で有意な差が認められた。海外への剣道普及に関しては、小学生も指導者も推進していくことを望んでいるが、オリンピック化に関しては、両者の意識には大きな開きがあることが分かった。

IV まとめ

小学生に対する剣道普及のあり方や剣道継続意欲を向上させる手立てを明らかにするために、小学生と指導者の剣道観について、両者の剣道観の特徴を小学生の剣道経験年数や指導者の段位の違い等から考察するとともに、両者の剣道に対する相互の意識を比較分析した結果、以下の結論を得た。

1. 小学生は、試合で勝つことや上の級を目指す技能向上への意欲が最も高く、また、剣道以外の行事への関心、剣道によって得られた効果、剣道の技能特性、剣道の普及や指導者の教え方に対して肯定的に捉える傾向にあった。しかし正座や黙想など剣道の伝統的な行動様式や剣道の先生への憧れ、さらには学校の成績への剣道の効果等に関しては消極的・否定的に捉えていた。
2. 指導者は、指導面では「気力」を重視し、「長所を伸ばす指導」を心がけていた。また、「剣道は他のスポーツよりも教育的意義が大きい」、「試合は剣道の普及に不可欠」、「もっと基本技の稽古に時間をかけるべき」及び「剣道が海外に今以上に広まってほしい」については肯定的に捉えていた。
3. 小学生においては、短期経験者の方が長期経験者よりも、試合練習や大会に関してより肯定的に捉えていた。また、両者とも剣道の先生に対して堅苦しいとは思っていないが、特に短期経験者においては最も否定的な項目であった。
4. 指導者においては、高段位者が低段位者よりも剣道の指導に関してより肯定的に捉えている傾向が認められた。「長所を伸ばす指導を中心とすべき」、「日本剣道形の指導重視」、「学校での剣道授業が剣道人口増大に寄与する」、「剣道以外のスポーツや文化的活動を行う」及び

「試合の勝負にこだわりすぎる指導者がいる」については高段位者のほうがより肯定的に捉えていた。しかし、「大人への初心者指導は子どもの初心者に対するのと同じで良い」については低段位者のほうがより肯定的に捉えていた。

5. 小学生と指導者の剣道に対する意識を比較した結果、「剣道と学業の関係」について、指導者は剣道が学業に良い影響を与えていると考えているが、小学生は成績が良くなったとは思っていなかった。また、小学生はもっと試合で勝ちたいと思っているが、指導者の考えとは大きな差異があった。「剣道以外の行事」を行うことについては、小学生のほうがより強く望んでいた。一方、指導者は「教え子に将来剣道の先生になってほしい」と希望しているが、剣道の先生になりたいと思っている小学生は少なかった。小学生は、気力、体力、技ともに重要視していたが、指導者は教え子の剣道が技を駆使することが最も大切であるとは捉えていなかった。小学生は剣道を外国に普及することとオリンピック化についての意識は同様に高かったが、指導者は外国に剣道を普及する意識は高かったものの、オリンピック化については否定的であり、外国への普及とオリンピック化は別であると捉えていた。

小学生に対する剣道普及には、現在剣道を行っている小学生の剣道継続意欲をさらに向上させる手立てと初心者の新たな確保が大きな課題である。剣道継続意欲を向上させるには、剣道経験年数、剣道に対する意識及び剣道の習熟度を踏まえて、指導者は小学生のモチベーションを高める創意・工夫をしなければならない。その前提として指導者自らが段位の向上や指導法の改善に取り組み、小学生から憧れられる良きモデルとしての指導者を目指すとともに、師弟同行の関係を大切にしなければならない。また、新たな初心者確保に必要なことは、積極的な広報活動はもちろんのこと、現在剣道を行っている小学生やその家族による周囲への呼びかけが何よりの手立てになるであろう。

その意味からも、現在剣道を継続している小学生の継続意欲をいかに向上させていくかが最重要課題といえよう。

引用・参考文献

- 1) 浅見裕・大田順康・大塚忠義・木原資裕・草間益良夫・山神眞一：現代青年の剣道観についての研究—剣道人口減少問題に関連して—, 武道学研究27巻2号, 8-17, 1995.
- 2) 浅見裕・岡嶋恒・木原資裕・高橋裕子・山神眞一：生涯剣道への可能性についての—考察—中学校剣道部員の意識の分析から—, スポーツ教育学研究18巻1号, 37-47, 1998.
- 3) 浅見裕・岡嶋恒・木原資裕・武藤健一郎：剣道指導者の剣道に関する意識についての—考察—学校指導者と道場指導者の比較—, 武道学研究32巻1号, 26-41, 1999.
- 4) 浅見裕(研究代表者)・木原資裕・植原吉朗・大塚忠義・岡嶋恒・高橋裕子・武藤健一郎・山神眞一：武道(剣道)の普及・継続に関わる要因の調査研究—少年剣道を支援する大人の意識について—, 平成9年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 1-52, 1999.
- 5) 飯塚剛・田中鎮雄：高校剣道指導に関する研究—大阪府を中心として—, 武道学研究19巻2号, 91-92, 1986.
- 6) 木原資裕・浅見裕・大塚忠義・松村司朗・横山直也・草間益良夫・山神眞一・境英俊・大田順康：剣道実践にともなう阻害要因の検討—経験年数による違いを中心に—, 武道学研究28巻1号, 33-45, 1995.
- 7) 木原資裕：(全国教育系大学剣道連盟編)教育剣道の科学, 大修館書店, 140, 2004.
- 8) 松村悦博・田中鎮雄・松下三郎・田辺英夫・武田正司：高校剣道指導に関する研究(その1)一部の指導目標と指導者の属性—, 武道学研究18巻2号, 79-80, 1985.
- 9) 岡嶋恒・浅見裕・植原吉朗・大保木輝雄・木原資裕・塩入宏行・高橋裕子・山神眞一：道場に通う小学生の剣道に対する意識—剣道の試

- 合実績と練習頻度による意識の違い一，武道学研究29巻3号，36-42，1997.
- 10) 岡村忠典：剣道人口の減少一高等学校の実態と問題点一，月刊武道，339号，100-107，1995.
- 11) 大塚忠義：現代剣道の担い手に関する研究一高校剣道部員の人口の推移に関する考察一，高知大学教育学部研究報告第2部，44号，15-31，1992.
- 12) 杉山重利：学校武道へのアプローチ①新しい武道の学習指導を考える，月刊「武道」，日本武道館，4月号，31，1991.
- 13) 角正武：(全国教育系大学学部剣道連盟研究会編) 剣道の学習指導，不味堂出版，13-14，1987.
- 14) 角正武：人を育てる剣道・第21回剣道を伝える(I)，月刊「武道」，日本武道館，2月号，76，2006.
- 15) 武田正司・田中鎮雄・松下三郎・田辺英夫：体育教師による格技指導の特長，武道学研究16巻1号，84-86，1984.
- 16) 武田正司・田中鎮雄・松下三郎・田辺英夫：高校剣道部の指導に関する研究，武道学研究17巻1号，8-9，1985.
- 17) 武田正司・田中鎮雄：体育教師による剣道指導の特長一高校剣道部場合一，武道学研究20巻2号，3-4，1987.
- 18) 田中鎮雄：高校格技指導の現象と問題一格技指導による価値志向の分析一，武道学研究14巻1号，1-8，1981.
- 19) 田中鎮雄：高校格技指導者の意識構造一指導法からみた学校格技の価値志向一，武道学研究14巻3号，9-16，1982.
- 20) 脇本三千雄：中学校の剣道部員が減少している，剣窓，150号，15-16，1994.
- 21) 山神眞一：特集武道の授業を考える・剣道の授業で学んでほしいこと，体育科教育，大修館書店，11，28-31，2005.
- 22) 全日本剣道連盟科学委員会調査研究部編：「小・中学生の剣道観」躍進社，28，1996.
- 23) 全日本剣道連盟編：「幼少年剣道指導要領(改訂版)」，サトウ印書館，11-13，2001.

〔平成18年8月2日 受付〕
〔平成18年12月21日 受理〕